

# 南さんの思い出

近藤 友子†

KONDO Tomoko

## 1. はじめに

今年の春、南徹さんがお亡くなりになったとの連絡をきいたとき、突然のことに驚き、お元気な南さんのご様子しか思い出せなかった。

南さんが創造都市研究科の知識情報基盤 修士課程にご入学されたとき私は博士課程であったが、ワークショップなどの授業でお顔をあわすことが多くあった。ワークショップではたいへん熱心に参加されておられ、講師への質問なども積極的にされていた。質問事項もとても的確で、興味深い内容が多く私はいつも参考にさせていただいていた。

## 2. 勉強熱心な南さん

南さんは入学された頃は“修士課程をゆっくり勉強して修了するよ”とおっしゃっていたが、その知識の深さや理解力を考えれば修士課程ではもの足りないのではないだろうかと思えるものであった。そして当然というべき優秀さで一年で修士課程を修了され、博士課程に進学されたことは同じ博士課程の学生としてたいへん心強く感じたことを覚えている。

修士課程での発表では、毎回とても落ち着いて研究内容を発表されていた。ご本人は緊張しているようなことを言われていたこともあったが、発表ではしっかりとした口調で説得力のある興味深い内容を述べられていた。その様子はまるで教員のように貫禄があると思ったこともあったが、のちに大学で教員をされることになったとのお話をおききしたときは、とても熱心な先生になれるのではないかと思った。南さんの大学での授業はとても良いものであったのではないだろうか。

## 3. 学生仲間への協力

博士課程に進学されてからも積極的にワークショップに出席され、質疑応答の時間はよく質問をされていてとても熱心だったことを思い出す。また、年齢は違えども同じく研究を行っている若い学生の大学院生仲間にとっても親切で優しくあったことが思い出される。特に同じ時期に入学した同級生の学生に対しては、ご自身が1年早く修了された経験を活かして発表の仕方や論文の書き方などを伝えて協力されていた。経験で培った知識をすぐに活用して役立て、論文作成や発表時の注意点や効果的な発表方法などを熱心に伝えて協力されていたご様子は、研究者としての学びへの関心の高さと人への優しさがあふれていたと感じさせられた。

また私自身も南さんに教えていただいたことはとても多かったと感じる。ワークショップ終了後にはその内容について討議を行ったり、お互いの研究内容について意見交換などを行ったこともあり、研究に対する新しい目線を開かせてくださることが多かった。特に南さんご自身の研究内容や今までの社会人としての経験を熱く語ってくださることは本当にとっても興味深いことばかりであった。社会人としての経験から、新聞やマスコミ関係等への意見や造詣はとにも興味深いものが多く、まだまだこれからもずっとお話をお聞きしたかったとも思う。私などでは考えもつかない視点から社会を捉え、意見を述べられ、その視野の広さはさすが南さんであると圧倒されるばかりであった。

二年ほど前に「図書館史」についての話をしたことがあった。私が「図書館史」に関する講義をする機会ができたときに、どのように講義を進めていけばよいのか、参考になる図書にはどのようなものがあるのか、といろいろと頭を悩ませていたときに南さんにアドバイスを求めたところ「図書館史は講義したことがあるか

---

†大阪市立大学大学院 創造都市研究科 都市情報環境研究領域 博士（後期）課程

ら・・・」といろいろと参考書の紹介や講義等についてのアドバイスをしてくださった。またメールでご自身の講義のシラバス項目を教えてください、講義の進め方の参考になるようにと協力を惜しまずアドバイスしてくださるなど、とても実践的なご意見をいただき参考になったことを覚えている。

#### 4. 南さんのエピソード

南さんは勉強時のみならず、ゼミの飲み会などでも欠かせない存在であった。目立つことなくゼミ生一人一人をしっかりと見守ってくださり、話題をうまくふりまいて場を盛り上げたり、帰宅時の電車の時間等に気を配ってくださっていたことが思い出される。北先生の退官記念パーティ後のゼミでの集まりでは、バーテンダーのまねをして飲み物を作るなどして場を盛り上げてくださり、茶目っ気を披露して下さる一場面もあった。本当に楽しいゼミ仲間であり、頼りになる方であった。

南さんのエピソードの中で、とても印象に残っていることがある。ワークショップ時のことだが、とても悪かったと恐縮されていた思い出である。たしか修士課程の学生が発表を行っているワークショップでの出来事であったと思う。発表が行われているときに急に誰かの携帯電話が鳴り、教室にいる皆が驚いた。そのとき慌てて南さんが携帯電話を持って走って外に出て行かれた。私を含めて何人かは鳴った携帯電話の主が南さんであったことに驚いたことと思う。まさか南さんが発表時のときに携帯電話が鳴るようにしていたとは思わず驚いたのである。ワークショップ終了後に南さんがとても申し訳なさそうに「家族に病気のものがいたので気になって携帯電話が鳴る状態のままになっていた・・・、発表時に鳴ってしまって悪かった・・・。」と話してくださったのを、今でも私は忘れることができない。本当にとても恐縮されていて、申し訳ないというご様子であった。南さんのご家族に対する優しさと、勉学の場での緊張感を破ってしまった申し訳なさが伝わってくる出来事であった。

#### 5. 南さんからの応援

ゼミでの集まりなどで顔をあわせたときはいつも研究のことなどを意見交換させていただいた。こうしたときいつも南さんは「僕はもう歳がいったから、これからは君達若い者がどんどん頑張ってやってほしい。」とゼミ生を応援されていた。私も何度も「博士論文頑張

って!」と応援していただいた。本当に有り難いことであり、今でもそのお声が聞こえてくるようである。ご自身は研究をどんどん進めておられるだけでなく、近年は大学での教員として大学生との積極的なかわりに熱意を持って頑張っておられたご様子にみえた。「大学で教えるようになるとは思わなかった。けど、若い人たちと話すのはとても楽しいし、こちらも研究の刺激になるね。」と言われていたことがあったが、そのときの南さんは本当に大学生とのやりとりが楽しそうであり、優しい笑顔を浮かべながらも目がとても輝いていたことが印象的であった。

#### 6. さいごにー南さんに感謝を込めて

まだまだこれからも南さんには社会人としての豊かな経験やご研究についてのお話をお伺いしたいと思っていた。ゼミでの集まりも中心となってゼミ生へお声をかけていただきたかった。「僕は図書館屋じゃないから・・・」と言いなながらも、そこからとても図書館人では気づかないような新しい視点でのお話を何度もしてくださり“図書館屋ではない視点からの気づき”から改めて図書館についての学びを深めるきっかけを与えてくださっていたことは本当に感謝するばかりである。「僕は図書館屋じゃないから」という言葉の中には「図書館屋がんばれ!」という応援が響いていることはとてもよく伝わってきていた。南さんの視野の広さと、皆への心配りの優しさと、応援を忘れずこれからも頑張っていきたいと思う。

南さん、本当にいろいろと有り難うございました。